

聖書：I サムエル 18：1～30

説教題：主はダビデとともにおられ

日時：2016年10月23日（夕拝）

前の章ではダビデとゴリヤテの戦いが記されました。ダビデは怪物ゴリヤテを、石投げとたった一つの石で倒してしまいました。この出来事がイスラエルの大ニュースにならないはずがありません。勝者ダビデを色々な人が歓迎します。まず出て来るのはサウルの息子ヨナタンです。1節に「ヨナタンの心はダビデの心に結びついた。ヨナタンは、自分と同じほどにダビデを愛した。」と記されています。聖書における最も美しい友情関係の一つであるダビデとヨナタンの関係はここに始まります。どうして世は単の心はダビデに結び付いたのでしょうか。新しく現れたイスラエルの英雄に対して、誰もがその魅力に引き付けられたでしようが、単にそういう意味ではなかったでしよう。二人を結び付けたのは、信仰の交わりだったでしよう。前の章のダビデの姿は、さらに前の14章で見たヨナタンの姿にも通じます。14章でイスラエルはペリシテ人に攻められて絶体絶命の大ピンチにありましたが、そんな中、ヨナタンは「大人数によるのであっても、小人数によるのであっても、主がお救いになるのに妨げとなるものは何もない。」と言って、道具持ちのしもべと二人だけでペリシテ人の先陣のところへ乗り込んで行き、まさかの逆転勝利を収めました。そのようなヨナタンは今ここに、自分と同じ信仰に立つ心から尊敬すべき器に出会ったのです。あのゴリヤテに対して、ただ主への信仰によって戦いを挑み、主によって勝利を治めた器を。その彼を見てヨナタンの心が深く結び付かずにいるはずがなかったのです。

これは私たちクリスチャンの交わりにも言えるでしよう。相手が洗礼を受けたクリスチャンであるというだけではまだそれほどでなくても、相手と交わっている内に、その人が本当に主に感謝し、主に信頼して一生懸命生きている姿を見ると、私たちには相手に対する尊敬と喜びの心が沸き起こって来る。そして自分の心は相手の心に結び付くように感じる。この世の人間関係では経験し得ない深い交わりを感じる。外見が違い、趣味が違い、年齢、性別、社会的地位などが異なっても、主にある深い一致を感じ、喜びを覚えずにいられない。ヨナタンはもっと深いレベルでダビデの心と結び付き、彼を尊敬し、彼を愛したのでしよう。

そしてヨナタンは4節でさらにダビデに、自分の上着を与え、自分のよろいかぶと、

剣、弓、帯まで与えました。ヨナタンはサウル王の子であり、普通に考えれば次の王です。その彼がダビデを愛し、ダビデを認めて、自分の権利を喜んでダビデに与えた。ここにヨナタンの賞賛すべき信仰が示されています。この後触れる今日のテーマに関係することですが、ダビデに嫉妬する人がいるとするなら、それはこのヨナタンでしょう。彼にとってダビデはライバルになり得ます。次の王の位を奪われるかもしれません。しかしヨナタンはダビデの信仰とその働きを見て、ダビデこそ主が祝福したもう特別の器だと見たのです。主が見るようにダビデを見、また評価したのです。そしてそのためには自分が保持していても良かった様々な王子としての祝福をもダビデに譲り渡した。私たちはヨナタンを見て、ダビデに競争で敗れた人とか、人生の負け組に属する人とは見ません。むしろこのことゆえに彼を大いなる信仰の人、心から尊敬すべき器として私たちは記憶するのです。

またヨナタンばかりでなく、サウル王もダビデを歓迎します。2節にあるように、サウルはダビデを召し抱えます。そして5節では「戦士たちの長」とします。彼がダビデに非常に好感を持っていたことが分かります。また5節後半にありますように、すべての民も、サウルの家来たちも、このことを喜びました。

しかし、最初は好感を持ってダビデを迎えたサウルでしたが、間もなくダビデを激しく嫉妬するようになります。きっかけは7節の女たちの歌でした。今日の私たちからすると、これはサウルを皮肉り、揶揄する歌のように見えなくもありませんが、注解者たちによると、そういう意味はここにはないそうです。「千」と「万」は10倍の関係にありますが、このように「ある数」と「その十倍の数」を並べる仕方はイスラエルによくあった表現で、その二つを比べて何かを言う意味はもともとはありませんでした。詩篇91篇7節：「千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない。」 ミカ書6章7節：「主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。」 ですから今日の7節の歌も、サウルをおとしめる意味はないのです。この歌の意味は、「サウルとダビデはたくさんの人々を打った！」ということです。「この二人のチームワークで、イスラエルは偉大な勝利を収めた！」ということです。しかしサウルはこれを最も悪い意味に取りました。彼は「ダビデに万を当て、私に千を当てた」と言って非常に怒り、不満に感じました。人々はダビデに10倍の評価を与えたと取り、心穏やかでなくなりました。そしてその日以来、サウルはダビデを疑いの目で見られるようになり、彼への激しい妬みを持つようになったのです。

これは果たして他人事でしょうか。この妬みを知らない人がいるのでしょうか。私たちも自分がある人に好感を持つだけならまだいいのです。ところが多くの人がその人に好感を持ち、「あの人は素晴らしい！」「あの人は素晴らしい！」と言うのを聞くとどうでしょう。だんだんと心の中に面白くないという感情が起こって来るのです。特に自分と同じような立場にある人についてそうでしょう。似たような環境にある人、同じような年齢、賜物を持った人、同じ職業、クラスの友達、あるいは隣近所や親戚同志の間で、周りの人々が自分ではない人の方をより評価する言葉を聞くと、耐えられなくなって来るのです。そしてその人がいる限り、自分の幸いはないかのように感じ始め、何とか相手が失敗し、評判を落とすことを願い、そのために行動しようとする。そのような嫉妬はその人自身をむしばみ、どんどん大きくなって行きます。そしてそのわだかまりはついに殺意にまで発展しかねない。

この章のサウルはまさにその危険な路線をたどって行きます。彼は精神が不安定になり、家の中で狂いわめくようになり、その癒しのためにダビデが琴を弾いていました。その彼にサウルは二度も槍を投げつけ、壁に突き刺そうとしたことが 10～11 節に記されています。それがうまく行かないと、12 節以降でサウルはダビデを自分のもとから離し、遠ざけようとし、彼とあまり関わりたくないと思ったのかもしれませんが。しかしダビデは益々成功を収め、人々はもっと彼を愛するようになります。そこでサウルは次の手を打ちます。彼は以前、ゴリヤテを倒した者には自分の娘を与えると約束していましたが、その約束を果たさなければと思ったのでしょうか。17 節で上の娘メラブをダビデに与えると言います。その代わりに「ただ、私のために勇敢に振る舞い、主の戦いを戦ってくれ。」と言います。一見、信仰的な言葉を口にしながら、心の中で願っていたのはダビデがペリシテ人との戦いで戦死すること。しかしどういいうわけか、娘をダビデに与えるという日になって彼女は他の人に与えられたと 19 節にあります。これはサウルの精神錯乱によるものなのか、あるいは意図的にダビデを辱めようとしたものなのか、良く分かりません。そして 20 節以降では、下の娘ミカルがダビデを愛しているのを良いことに、彼女を利用してダビデを殺そうとします。家来たちを通して、花嫁料はいらぬからペリシテ人の陽の皮 100 を欲しいと伝えます。陽の皮とは男性の生殖器の皮のことです。つまりそれだけの人数を確かに殺したことの明白な証拠を持って来るようにということです。それをする間にダビデの命は失われるだろうとサウルは目論んだわけです。

なぜサウルはこのような行動へ駆り立てられたのでしょうか。その根本的な理由が12節にあります。「サウルはダビデを恐れた。主はダビデとともにおられ、サウルのところから去られたからである。」 自分は何をやってもうまく行かないのに、ダビデは何をやっても祝福される。これは神がえこひいきしているということでしょうか。神に問題があるのでしょうか。そうではないことを、ここまでサムエル記を読んで来た私たちは知っています。主がサウルのところから去られたのは、サウルが主を退けたからです。サウルが繰り返し、主の命令に従わなかったからです。その結果として、サウルは主が共にいて下さる祝福を失い、何をやらせてもうまく行かなくなったのです。むしろ自分は王位から退けられている、主に捨てられているという思いが支配的になり、そのことが彼をたまらない不安と恐れに追いやっていたのです。そんな中、ダビデが何をやらせてもうまく行く姿を見て羨ましく思ったのも理解できます。しかし大事なことは、そこでどういう道を自分は選択して行くのかということでしょう。

サウルが選んだ道は、自分の知恵と力でダビデを栄光から引きずり降ろそうと図る道でした。しかしこれでは何も解決しません。彼はこうして神に挑戦する愚かな道を進んだのです。今日の話の展開を良く見て下さい。サウルの試みたことはすべて裏目に出て、逆効果になっています。神に戦いを挑んで勝てるわけがないのです。そして何よりも、妬みと敵意に駆り立てられて一層苦しんだのはサウル本人です。

ではサウルはどうすべきだったのでしょうか。サウルが主の臨在を失ったのは彼の罪によることでした。その問題がそのまま放置されていたので、主との関係は疎遠になっていました。サウルのすべきことは、そのような自分をまず悔い改め、神との正しい関係に早くに立ち返ることでした。神は真に悔い改める者を決して蔑まれません。黙示録2章4～5節:「あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさなさい。」 そうするなら神は憐れんで赦して下さい、再びご自身が共にいる臨在の祝福を回復して下さい。確かにそうしても王位は再び彼の家には戻って来ないかもしれません。いや戻って来ないでしょう。主がはっきりとそう宣言されたのですから。しかしそんなサウルにも神の最善の導きと祝福が与えられるはずです。王としての栄光ではなくても、神の子どもである祝福は与えられるのです。そして神が一番良いと定められた最善最高の祝福を下さるはずです。一人一人与えられる導きや祝福は異なりますが、何も他者の

それを妬む必要はありません。私には私への神の最高のご計画があるのです！その神との正しい関係、そして神が共にいて下さる祝福に立ち返ることこそ、他人への嫉妬から解放されて真の祝福を受ける道ではないでしょうか。

私たちは一方のダビデの姿に、サウルとは対照的に主が共にいて下さる祝福を見ます。主がダビデと共におられたことは、12 節、14 節、28 節で繰り返され、強調されています。一つ心に留めたいことは、主が共にいて下さっても危険な目に会うことはあるということです。ダビデはサウルから槍を投げつけられ、壁に突き刺されそうになりました。表面的に見れば、主は本当にともにおられるのかと言いたくなる状況でしょう。しかし事實は主が共におられたので、ダビデはあらゆる危険から守られたのです。サウルの槍からも、それに続く様々な策略からも。むしろそうしたサウルの悪がみな用いられてダビデへの一層の祝福へつながりました。ですから私たちは神と正しい関係に立ち返っているなら、困難な道を歩いているとしても、心騒がせなくて良いのです。主はその悪からも善を取り出してくださる方です。そしてダビデは主が共にいて下さったことによって大きな働きができました。サウルは陽の皮 100 を求めたのに対し、27 節にあるように、ダビデは倍の 200 を持ち帰ったというところにそのことが示されています。

サウルは残念ながら益々嫉みの思いによって自らをむしばみ、抑えようのない敵意と殺意へ走って行きます。私たちは彼のことを色々言えるかもしれませんが。しかしこの嫉妬を知らない人が誰かいるでしょうか。私たちも誰かを嫉妬し、そのために心も生活もかき乱されていると感じるなら考えてみるべきです。それは私と神の関係について何かを示してはいないだろうか、と。もし私たちが神と正しい関係にあり、神が自分と共にいて下さっていることを知る喜びと満足の内にあるなら、他の誰かを妬む必要など全然感じないはずです。他の人は私が持っていない祝福を受けているかもしれませんが、神は私には私にとって一番良いご計画と祝福を持って導いて下さっている。永遠の御国へつながる最高最善の人生を私に備え、導いて下さっている。この神の臨在と守りを心から感謝し、賛美している時、私たちは他の人に与えられる祝福を真心から一緒に喜ぶことができるのです。そして神に愛されていることを感謝する人は、1 ヨハネ 4 章 11 節のように歩むでしょう。「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛して下さったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」 これは互いに妬み合う生活と何と異なるものでしょうか！神が私を愛し、私と共にいて下さることを知り、感謝する時、その神への応答として、私たちは他者を殺すのではなく、愛するように導かれるはずです。

これが信仰者の歩むべき道であり、神と共に歩む人が示すべき姿です。私たちは神と自分の関係をもう一度見直し、神が共にいて下さる喜びと満足を新しく頂いて、そこから神に全く信頼して歩む希望の歩みと、また他者の祝福を喜び、互いを一層愛する歩みへ導かれて行きたいと思います。